

三、豊田講堂の建設寄付

◆図書館・講堂建設の具体化

前章において何度も触れたように、名古屋大学では、一九三九（昭和一四）年の名帝大創設当時から「約束」に基づいて、図書館と講堂は地元からの現物寄付を受けるという方針が堅持されてきました。ただし、戦時下における物資不足、さらには戦後における物価高騰などによつて、その「約束」を実現できない状況が戦後もしばらく続いていました。

しかし、新制大学として再発足した名古屋大学が、医学部を除くほとんどの部局を東山地区に集結させることを内容とする「名古屋大学整備計画」を進める過程で、東山地区における図書館と講堂の建築計画の具体化が求められるようになってきました。

そこで本章では、ようやく実現の兆しがみえてきた講堂の現物寄付の経緯について、当時の名古屋大学事務局長を務めていた須川義弘による回顧録『半生を顧みる』（一九八二年）に基づきながら、紹介したいと思います。

◆名帝大設置期成同盟会からの寄付金

第一章で述べたように、名帝大の創設当時、名帝大設置期成同盟会は図書館と講堂の建設費として約一〇〇万円の寄付金を集めていましたが、戦前は物資不足などの理由によってその寄付金は名古屋商工会議所で保管されていました。また、戦後になつても、物価の高騰や預金封鎖などによって両施設の建設は困難な状況にありました。

その後、その寄付金は、名古屋商工会議所とも相談の上、名古屋市千種区の猫ヶ洞池付近の徳川山（現在の千種区徳川山町）の取得費用として活用されました。そして、さらにその後その土地は一部を残して名古屋市に売却され、その売却金は名古屋大学が文科系学部を創設した際の招へい教員用住宅（徳川山職員住宅）の建設費に活用されています。

◆講堂の建設を優先

東山地区の整備が進んでいた一九五〇年代後半、それまでは一体的に扱われていた図書館と講堂の現物寄付についての考え方が加えられました。それは、諸般の情勢から判断して図書館と講堂の二つの施設を同時に計画することは困難であるため、まずは講堂の建設を優先させるといったものでした。当時のようすについて、須川は次のように記しています。

(前略)：建築交換によつて東山地区の整備も漸次進んできたので、図書館と講堂の建設もそろそろ具体策を考える必要が起きてきた。：(略)：再度建設寄附金を集めるのは大変なことだし、また図書館と講堂の二つを同時に計画するのも困難なので、図書館は後廻しにして講堂を先に考えることにした。寄附金集めも、歴史の古い大学ならば卒業生を中心に募金するという方法もあるが、若い名古屋大学にはその手はない。地元の財界人から数万円ずつを集めるにしても、創設時と違つて今日では億という金はとて見込みはない。むしろ、東京大学の安田講堂のように、寄附者の名が付くような個人寄附による方が可能性がある、そんな篤志家はないものかと、勝沼総長とよりより話し合っていた。

(須川『半生を顧みる』一四一〜一四二頁)

◆トヨタ自動車工業株式会社への寄付依頼

こうして、勝沼精蔵総長と須川義弘事務局長によつて、講堂寄付を引き受けてもらえる篤志家探しが始まりました。引き続き、須川の回顧から当時のようすを紹介しておきましょう。

あれこれ思案中、ふと思いついたのが発明王と言われた豊田佐吉翁である。翁の残した事業の一つであるトヨタ自動車工業株式会社は、いま時流に乗つて発展を続けている。あの会



第3代名古屋大学総長
勝沼 精蔵



トヨタ自動車工業株式会社
石田 退三 社長

◆建設寄付の承諾

社に発明王豊田佐吉翁の記念事業として、学術研究の府である名古屋大学に講堂を建設寄附してもらうことは、受ける大学としても贈るトヨタとしても意義深いものがある。それに、勝沼先生は佐吉翁の女婿豊田利三郎氏の脈を取られた縁故もあるから話もし易いのでは、と先生に相談すると、「そうだ、それはよかろう」と早速石田退三社長を訪ねて下さった。

(須川『半生を顧みる』一四二頁)

このとき勝沼総長は、石田退三社長に対して、故豊田佐吉を記念する事業として総額一億円規模の講堂の建設寄付を依頼しましたが、当初はその承諾を得ることができませんでした。しかし、勝沼総長の三度目の依頼に対して、トヨタ自動車工

業(株)から建設寄付受諾の返事を得ることができました。

忘れもしないが、昭和三十三年（一九五八年―引用者）十一月二十四日本部応接室で学部長会の最中に、「石田社長から総長に電話です」と秘書が告げてきた。暫くして先生は会議の席に帰られて、側にいた私に小さい声で、「講堂を寄附してくれることになったよ、そして一億円ではなく二億円だ」と耳打ちして下さった。その時の嬉しさは今に忘れられない。向う様で既に二倍にして下さっている。∴（略）∴学部長会が終わると直ちに、勝沼先生のお伴をして名古屋駅前の豊田ビルに挨拶に行った。石田社長は∴（略）∴大学では一億円とのことだが、千八百席の講堂はどの位かかるのかと会社の技術部に計算させたら二億円以下では出来ないとのことだったので、折角寄附するのだから恥ずかしくないものをと、倍額にしたのだと話された。勝沼先生ともども厚くお礼を述べたのだった。

（須川『半生を顧みる』一四三頁）

◆講堂の設計打ち合わせ

講堂の建設寄付承諾の知らせを受けた日から一週間後の一九五八年一月一日、勝沼総長と須川事務局長は、名古屋駅前の豊田ビル内で四人の人物と打ち合わせを行っています。そのう

ちの一人は石田社長で、残る三名は竹中工務店の岩井支店長、同工務店の宮地設計部長、さらにワシントン大学（建築学）の榎文彦準教授でした。寄付される講堂は、榎準教授が設計を担当し、竹中工務店が建設を行うというのがトヨタ自動車工業(株)側の希望であったのです。須川の回顧によって当時のようすをみておきます。

大学としては、折角の二億円の大講堂だから安田講堂のように本部の事務室を入れる希望もあったが、石田社長は立派な講堂にしたいとお話だったので本部は入らないことにした。その代わり、会議室は大小三室を、また講堂ホールでは演芸等は行わないことにしてステージは移動式とし、これを取り除けば大円卓会議等もできるように、更に冷暖房等も維持費のかからない方式を希望した。本部は入らないことになったが、石田社長からは二階の一番眺めのよい所に総長室を、また総長室を作れば事務局長室も必要だし、貴賓室もなくてはならぬと助言があった。

（須川『半生を顧みる』一四三〜一四四頁）

◆建設工事の開始

その後、年末にはおおよその建設計画ができあがり、翌一九五九年二月七日付けで勝沼総長

から文部大臣あてに「建物建設寄附受領について」と題する認可申請書類が提出されました。この申請に対しては、同年三月一八日付けで文部大臣から寄付受領の「認可指令書」（学会第一四三号）が出されています。

そして、同年三月二四日には、トヨタ自動車工業(株)の関係者と大学側関係者が列席して鋳入れ式が行われました。なお、全体の工期については、石田社長の希望にに応じて、一九六〇年二月中には工事を終了し、翌三月初旬には竣工式を行うことが予定されていました。

◆整備計画委員会への付議

一方、鋳入れ式に先立つ一九五九年三月一六日、名古屋大学の整備計画委員会（現在の整備委員会）において、トヨタ自動車工業(株)からの講堂建築寄付の件が提案・了承されました。同日の委員会では、寄付される講堂は一八〇〇席で、補助椅子を含めると二〇〇〇名を収容できる規模のものであること、建設場所については「従来から定められていた位置」とされており、「位置」については、資料上で確認はできませんが、おそらく現在の位置であると推測されます。

なお、講堂の規模については、同年七月二〇日開催の同委員会で総長室と会議室は設置するが事務局本部を設置できなかったことが報告されています。



豊田講堂の石膏模型

◆講堂名の確定

一九五九年三月二三日に開催された評議会で、勝沼総長から、①講堂の建設は株式会社竹中組(マ)が請け負うこと、②設計は竹中組(マ)の設計嘱託の榎文彦ワシントン大学準教授が担当すること、③名称は豊田講堂とすること、の三点について提案・説明があり、いずれも異議なく了承されました。

なお、講堂の名称を「トヨタ講堂」ではなく「豊田講堂」とした理由については、別の資料において次のように説明されています。

本講堂は寄附者が会社の創設者であり豊田織機の発明者である故豊田佐吉翁の記念として寄附されたものであるので本学受領の上は寄附者の意志を尊重して豊田講堂と呼称する

こととしたい。

(一九五九年二月七日付 会第一八七号 「建物建設寄附受領について」)

◆備品等の購入費用

トヨタ自動車工業(株)からの建設寄付の内容は、当然のことながら、講堂としての基本的な設備・附帯工作物を含めた建物施設の寄付に限られていました。しかし、二億円規模の立派な施設には、それに見合った調度品などが必要となつてきます。名古屋大学では、国費でそうした調度品を揃えるには無理があるとの判断から、その購入費用の捻出方法を考える必要が出てきました。

実は名古屋大学では、この調度品購入に際してもトヨタ自動車工業(株)に少なからぬ便宜を図ってもらっています。須川の回顧によって、それを紹介しておきます。

講堂内の設備は基本的なものは建物と共に整備されるが、足りないものは国費で補充しなければならぬ。豪華な建物と上等の基本設備に国費で作った粗末な什器では釣合いが取れないので、何とかしたいと考えた末、あまりにも厚かましいとは思ったが、会社が出す二億円のうち半分でも早く出してもらって、これを預金して利子稼ぎをしたいと願いますと、

石田社長は、「国費ではそうだろう、花井経理部長、何とかして上げられないか」と同情して下さった。同席の部長も社長の言葉ならと承知され、一億円を早速に出してもらって三井銀行に預金した。その利子は六百万円となって、設備の上で非常に助かったことも併せて感謝しなければならぬ。

（須川『半生を顧みる』一四五頁）

◆伊勢湾台風による工事の遅れ

一九五九年九月、台風一五号がマリアナ群島の東で発生し、この台風は硫黄島付近に達した頃には中心気圧八九四ヘクトパスカル、最大瞬間風速七五メートルの超大型台風に発達しました。全国で約五〇〇〇名の死者・行方不明者を出し、「昭和の三大台風」の一つである伊勢湾台風です。この伊勢湾台風によつて、名古屋大学では多くの教職員・学生が被災するとともに、大学の施設も甚大な被害を受けました。

当然のことながら、当時進められていた豊田講堂の建設工事も伊勢湾台風の影響を少なからず受けました。当時の現場主任は、「未曾有の伊勢湾台風に見舞われ、建込中の型枠の破損、事務所、下小屋、飯場の倒壊等で相当な痛手を受け、…（略）…工程上一カ月半の空白期間を過して、十一月上旬本工事を再開」したとの施工メモを残しています。また、この工事の遅れ



台風のあとかたづけを終えて作業再開のようす
(1959年11月15日)

に関連して、須川の回顧録には次のような記述もみられます。

竹中工務店は石田社長の指示どおり三十五年（一九六〇年―引用者）二月に完成するよう工事を急ぎ、前庭のコンクリート打ち等は厳寒期に入ったので、テントシートで覆って赤外線ランプをつけて凍結を防ぐなど随分苦勞し、費用もかさんで二億八千万円にもなったそうだ：（略）：

（須川『半生を顧みる』一四五～一四六頁）

◆竣工

一九五九年三月二四日に始まった豊田講堂新築工事は、一九六〇年三月六日に躯体工事が完了しました。すでに紹介したように、トヨタ自動車工業(株)の石田社長の希望は、一九六〇年二月中の工事完成、三月初旬

の竣工式の開催でしたから、伊勢湾台風による遅れを勘案すると工事そのものはきわめて急ピッチで進められたといえます。

一方、豊田講堂の竣工日は一九六〇年五月九日とされ、同日には次章で紹介する完成式典が開催されました。なお、この完成式典に先立ち、躯体工事完了後には一九五九年度卒業式と一九六〇年度入学式が豊田講堂で行われています。

以上、本章では、豊田講堂の建設寄付について述べてきました。この豊田講堂新築に関する工事概要をまとめると、表3のようになります。

表3 名古屋大学豊田講堂新築工事の概要

1. 建 築 地	名古屋市千種区不老町
2. 敷 地 面 積	375,851m ²
3. 構 造	鉄筋コンクリート造屋根シェル構造
4. 建 築 面 積	3,123.6m ²
5. 床 面 積	地下1階・地上2階・中2階付・塔屋3階建・ 建延6,270.22m ²
6. 客 席 面 積	固定席1,612席・補助席200席・ 計1,812席
7. 工 事 着 工	1959(昭和34)年3月24日
8. 軀 体 工 事 完 了	1960(昭和35)年3月6日
9. 工 事 竣 工	1960(昭和35)年5月9日
10. 工 事 施 行 者	株式会社 竹中工務店
11. 工 事 就 労 延 人 員	約50,000人
12. 主 な 設 備	冷暖房設備
13. 施 行 費	2 億 円